七月五雲会

七月十八日（土）
正午始
開場　午前十一時

12:00

加茂

天女　上野　能寛
ツレ　今井　哲也
シテ　木谷　基

ワキ　野口　能弘
ワキツレ　野口　琢弘
〃　小林　克都
間　石田　淡朗

大鼓　亀井　洋佑
小鼓　住駒　俊介
太鼓　金春惣右衛門
笛　寺井　義明

後見　佐野　由於
小林　晋也

地謡　内藤　飛能
大友　順
高橋　亘
亀井　雄二
佐野　宜弘

13:30

磁石

深田　博治
飯田　豪
岡　聡史

播州室の明神」の神職は、同一体の由緒を持つ都の「下加茂神社」にゆかりの白木綿を廻らし、白羽の矢を立てて祭ってあげ、折も水を汲む二人の女性に行き逢い、そこの加謂れを尋ねると、その白羽の矢こそ、茂の明神誕生の起源でし た。即ち、汲む女性の水桶に、流れて来た矢を懐家に持ち帰って飾って置くと、女性に天に妊し、その子が三歳になったなら、時が二人の女性は神の御祖の神が天女の舞を舞って去り、別雷の半は神であることをのでめし、後豪快に豊穣を寿ぎます。

能「加茂」（かも）

遠江国の田舎者が上京する途中、近江国の大津松本の市を見物する途中、あるの田舎者に声をかけられる。男は言葉巧みに田舎者を宿へと案内する。男は実は人の買い眠り売りを、田舎者を主人の宿へと飛ばされ、しは宿屋に泊まる。男しかし話を盗みに聞いて、先回りして、主人の宿屋のてしまう。慌てて追っかけて、田舎者にかせられるが…。

狂言「磁石」（じしゃく）

14:10

藤

シテ　辰巳　和磨

ワキ　舘田　善博
ワキツレ　大日方　寛
〃　御厨　誠吾
間　中村　修一

大鼓　安福　光雄
小鼓　住駒　充彦
太鼓　林　雄一郎
笛　藤田　貴寛

後見　金森　秀祥
水上　優

地謡　當山　淳司
高橋　憲正
小倉　健太郎
東川　尚史
辰巳　大二郎

越中氷見の里へやって来た僧が、花盛り美しい藤と松の歌を口ずさむと、美しい女が現れ、ここは藤の名所なので、松の名を立てた歌よりも藤の賛美をする歌があるなら、ここに、僧の心根を柔らかくたるしよう。と、僧は実は藤の精霊であるのを名乗り、女の夕暮れ姿をすると、その夜の藤の夢に陰の姿で現れ、春の風情を讃え、花の季節の中夏へ移り変わる戯れ、袖を翻して優美な舞を舞って消え失せます。

能「藤」（ふじ）

15:55

禅師曽我

シテ　朝倉　大輔

ワキ　梅村　昌功
間　内藤　連

大鼓　亀井　広忠
小鼓　飯冨　孔明
太鼓　澤田　晃良
笛　熊本俊太郎

後見　宝生　和英
朝倉　俊樹

地謡　金森　良充
和久荘太郎
小倉伸二郎
藪　克徳
田崎　甫

立衆　藤井　秋雅
〃　金井　賢郎
〃　川瀬　隆士
〃　金野　泰大
金森　隆晋

曽我兄弟の末弟である禅師は、母の言いつけを守り出家して、国上寺にいました。頼朝の富士の巻き狩りがあり、十郎祐成と五郎時致が敵討ちの本懐を遂げようと、落ちぶれた母は、禅師に頼みの綱の文を届けるよう配達を命じ、押し寄せる伊藤祐宗が読み始めたのかを聞いた落ち武者を捕らえ、生け捕りにされ、鎌倉へ送られてしまいます。

能「禅師曽我」（ぜんじそが）

終演予定十六時二十五分頃

〈休憩十五分〉

〈休憩十五分〉

次回予告

二〇二〇年九月十九日（土）
正午始

呉服	和久荘太郎
藤栄	小倉伸二郎
殺生石	小林晋也